



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2019年 5月号

「復活の永遠の命をまとう」

牧師・園長 長村亮介

「夜空ノムコウ」

あれからぼくたちは 何かを信じて来れたかなあ・・・
 夜空のむこうには 明日がもう待っている

誰かの声に気づき ぼくらは身をひそめた
 公園のフェンス越しに 夜の風が吹いた

君が何か伝えようと にぎり返したその手は
 ぼくの心のやわらかい場所を 今でもまだしめつける

あれからぼくたちは 何かを信じてこれたかなあ・・・
 マドをそっと開けてみる 冬の風のおいがした

悲しみっていつかは 消えてしまうものかなあ・・・
 タメ息は少しだけ 白く残ってすぐ消えた

歩き出すことさえも いちいちためらうくせに
 つまらない常識など つぶせると思ってた

君に話した言葉は どれだけ残っているの？
 ぼくの心のいちばん奥で から回りしつづける

あのころの未来に ぼくらは立っているのかなあ・・・
 全てが思うほど うまくはいかないみたいだ

このままでこまでも 日々は続いていくのかなあ・・・
 雲のない星空が マドのむこうにつづいている

あれからぼくたちは 何かを信じてこれたかなあ・・・
 夜空のむこうには もう明日が待っている

(作詞：スガシカオ 作曲：川村 結花)

私の「平成」の一曲はこれかなと思います。一九九八年に「S.M.A.P」が歌ってヒットしました。歌を聴くときのイメージは人それぞれとは思いますが、私にとつてこれは「若い時、夜の公園にいっしょにいた君を懐かしむ」というのは少し異なり、創世記でアダムとエバが悪魔の化身である蛇に唆されて、神さまに禁じられた「善悪の知識の木の実」を食べてしまい、神さまの御前から隠れてしまったという、あの「エデンの園」での出来事に重なってしまうのです。

「その日、風が吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか。』」

(創三・八、九)

これが「原罪」と言われる出来事ですが、もちろん、この「夜空ノムコウ」に「原罪」が歌われているわけはありません。ただここに私は、「生きることの情けなさ」や、「心もとなさ」のようなものを感じてしまうのです。今日の私たちの生きていく気分としては、確たる信念もなく生きてしまつて、しかしその捉えどころのない人生にも、明日はきつと来るものなのだと思いたいといううな「浮遊感」ではないでしょうか。そしてこの「浮遊感」は、神さまの御前から姿を消したアダムとエバの「不安感」、「恐れ」に通じるものがあるのではないかと私は思うのです。先述の創世記は次のように続きます。

「彼は答えた。『あなたの足音が聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。』神は言われた。『お前が裸であることを誰が告げたのか。取つて食べるなど命じた木から食べたのか。』」

(創三・一〇、一一)

「裸」。この「不安感」をこの歌は「あれからぼくたちは 何かを信じて来れたかなあ・・・。」と言っているように私には聞こえます。でも、そのようなひ弱な「不安感」が、私たちの本音なのではないでしょうか。しかし、私たちが愛して創造された神さまが、私たちを「裸」のままに置いて放置されるというのは、御心ではないかと思うのです。「イエス・キリストを信じる」ということは、神さまが「裸」の私たちに、十字架の死から復活されたイエスさまの永遠の命をまわらせてくださることではないかかと思えます。たとえ私たちが自身が、この世でどんなに頼りなくても、Ω

平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園
2019年 5月号